

日本職業・災害医学会会誌 第51巻 第5号
 Japanese Journal of Occupational Medicine and Traumatology
 Vol. 51 No. 5 September 2003

巻頭言

次世代の医療人を育てよう

豊田 隆謙

東北労災病院長

職業・災害医学からイメージすることは阪神大震災です。あの時は何にも手伝えなかったと言う無念な思いが続いています。その後、東北大学病院長として災害対策をたてたが、昔戦争中に食べた「かたばん」と「ジュース」を2年ごとにとりかえる作業の繰り返し。無駄の連続でした。

ある市民講座で講演が終ってから、市民からの質問を受けつけることになりました。「先生は何故医者になろうとしたか」。走馬灯のように45年前をふりかえり、「母が病弱だったのでなんとか助けようと医者になる決心をしました」とまるっきり嘘の答えをして拍手喝采。聴衆が望んでいるように答えなさいと云う教訓に従いました。その母が94歳でまだ健在。

東北大学医学部を昭和36年（1961）に卒業した頃に国民皆保険制度が成立しました。武見太郎先生が率いる医師会が反対していた記憶が残っています。その頃からGNP（General National Product）がプラスで、経済が右肩あがりになり、公害問題が発生しました。公害喘息の実態調査に三島市や四日市に出かけました。やがて公害対策基本法が成立しましたが（1967年）、環境基本法が成立して、これは消滅（1993年）しました。時の流れの早さにびっくりしたところです。

公害が目立たなくなり、災害も少なくなり、労災保険が使われなくなりました。東北大学病院から東北労災病院に移ってから、労災病院が勤労者医療を行なっていると知りました。勤労者医療の中身が問題です。現在は心の問題がクローズアップされています。確かに心のケアの電話相談は勤労者にとって役立っていますが、一方では電話相談している人の名前や居場所を明らかにすると危険なこともあると教えられ、これはどう言うことなのかを考えてみました。

人間をみつめなおす時代になったのでしょうか。20世紀末期には構造主義では乗り切れないと言う議論を思い出しました。構造主義とは一体どのような概念かと自問自答してみたのです。原因があって結果がでると言う単純なことではないことは分りました。これまであたりまえと思こんでいる誤り（構造主義）に気づくことでした。構造主義に関連して、マルクス、フロイド、ニーチェ、ソシュールなどの名前がでて来ますから、今さら何を言うかと思われるでしょうが、フロイドのことすらロクに理解していないのです。それで上っ面をなでるように問題を絞ってみますと次のようなことになりました。邪悪な人間はナルシシズムの人格障害のカテゴリーでくくられています。この人格障害はセクシャルハラスメントだけでなくモラルハラスメントにも関連する共通項です。妄想症の人格は自我の肥大（自尊心）、精神硬直（冷い合理性）、警戒心（不信感 嫉妬心）、誤解（自分に対する悪意）で構築されていますが、社会生活の規則を知りながらその規則をかいくぐることに喜びを感じるのがモラルハラスメントの加害者の特徴だそうです。日本ハム事件や原子力発電所問題などの関係者を人間としてみると、大なり小なりこのような人間の性格と無関係とは言い切れなくなりました。それはともかく、生涯に1、2度遭遇するにすぎない極めて希な人格異常者がどのような過程で生れてくるのかを知りたいと思いました。三歳までの赤坊は精神分裂気質にみえることがありますが、ことばをおぼえ、成長するに従って成熟して、事なきにいたります。この成熟が十分でない統合失調症状態になるのかもしれませんが。成熟とは差別、不条理、理不尽などに屈服する過程だと説明されますが、これも極端すぎる解釈だと思います。「理不尽な事実を理解した気になる心理構造が刷り込まれる」と言う記述が妥当のようです。ともかく成熟は人の道なのです。邪悪に対置するものが崇高、善良だとすると、生涯に出会うことのできる数少ない偉人や賢人から学ぶことの方がもっと大切です。このような人が邪悪の人間を見抜くすべを知っているのかもしれませんが。

医療に携わる人たちがこのような邪悪な人たちからどう守るかを考える必要があります。接遇法には部分的に身を守る術が含まれています。賢い看護師たちはすぐのみこんだようです。つまり成熟していない人の見分けかたを学ぶ

ことです。これは医療の実践で無駄な労力を費やさず、本来の医療を安心して行う上で欠かせないことです。医療訴訟が増えていますが、安全医療を心がけてさえおれば、性格異常者につけこまれることもないということも真理です。

職業・災害医学の話題に戻りますが、これまでは整形的あるいは外科的治療を必要とする疾患のように思いがちでしたが、職場や家庭環境の未知の因子による人間破壊を探索し、対策を考える時代になりつつあると思われまので、この領域の医療は末広がり発展するのではないのでしょうか。希望的観測かもしれませんが、苦しい時代に夢を追うことが大切です。ナノテクノロジーが夢をかなえてくれるかもしれません。悪口を言われ続けているコンピュータもユビキタス コンピュータの開発がすすめば、生活の一部になるということです。未来の職業・災害医学の主題は随分変化するのではないのでしょうか。次の時代を担う医療人をこの学会が育てるという使命感をもちたいと思います。